



特 18
1833
74



繪本左圖記七篇卷之二

目録

大塚原而石見話

若井之石見屋を名園

又右邊門仍巡見後話

又右邊門壽壽の園

又右邊門英徳園大垣又新方園

又右邊門新上後話

繪本甚妙右邊門若と新上園

繪本甚妙右邊門若と新上園

悪党多理依て後多分経る園

田丸之家断絶話

又右邊門岩草の城又別る園

又右邊門田丸の家士と欺て黄金と換る園

田丸家の婢女を拷問の園

根来寺宝塔住持盗賊話

又右邊門に属する者も又退散する園

根来寺宝塔に盗賊住る園

左圖記七篇卷二

大盗隱而不顯

其家産しく困窮乃大名たり其謀計よりあるはじき
 又亦あるの恩顧其分の檢約して巨万の財宝と換しわどみ
 却て今身は殃を引出せり其財多きい分を獲るは害ありと
 知る身を中へらるん扱も其世が家中の武士に又打の冷道
 務き主人の妾居心えはしと息を切て其の森の邊まで強つけ
 されども又合戦の俸も無く其後いつく又ぬきは寂寥とし
 て人をもはし懐くともぐり移る中又強捕へり申問兩人が死
 骸あり扱ひけられく強劫は物ならん其世の御方の



東鑑言十篇卷二

東鑑言十篇卷二

上受取也、伏見と馳付てその中うと所可なり、其馬を走
 せし急ぐむより、其控馬守、同勢列進し、二ツ引のおりせし
 燈籠とし、まをせぬり、素の瓜見りより、家中のせんく馬より飛
 り、地よひまふし、狼藉者、教まらぬ、遠り兵具を以て、戦ふ及ひ
 には、足腰たが、進進、勢なき、元抱も、えり、人、後、倍、の、た、ち、馳、せ、り
 以、不、差、る、れ、所、款、を、と、辨、け、上、の、飲、び、や、い、る、れ、と、一、繞、を、段、中
 以、よ、ぞ、世、馬、守、大、き、ま、移、り、れ、こ、心、得、ぬ、今、宵、の、首、尾、を、素、及
 中、ま、抄、ひ、く、ま、く、狼、藉、者、の、妨、は、し、伏、見、と、到、り、石、田、治、部、が
 捕、り、追、ひ、ま、り、素、及、云、の、所、を、た、り、て、素、上、の、首、中、に、し、は、治、部
 が、捕、其、不、審、し、殿、下、の、足、下、と、り、せ、移、り、い、ま、ご、不、審、こ、と、ん
 素、が、素、素、た、治、六、郎、右、衛、門、と、云、者、は、し、五、次、の、者、の、後、に、や、ま、り、れ

但、一、陣、の、者、の、不、お、む、と、何、より、ら、は、殿、上、の、所、を、ま、違、し
 ず、は、御、石、り、た、は、夜、中、の、登、城、御、疑、い、と、世、あ、の、御、り、ら、は、三、成
 の、御、り、方、体、よ、み、る、ま、り、ま、り、降、系、統、る、と、と、按、よ、お、違、の、み、た
 して、只、今、み、降、る、不、に、條、為、が、中、系、素、以、て、不、思、儀、の、次、弟、何
 者、の、仕、業、ち、り、と、ん、と、沈、吟、し、て、あ、々、れ、が、家、中、の、武、士、と、も、御、天
 し、何、と、ま、ま、先、の、狐狸、の、如、く、不、お、る、若、や、天、物、な、と、の、ま、ま、ご、ら、う、ん
 と、疑、入、者、も、ま、り、ら、り、先、急、ぎ、系、部、の、登、後、ま、り、降、り、靜、ま、り、と
 乳、以、給、し、と、一、箇、中、お、打、連、て、り、と、より、んで、子、卒、毎、り、の、登、後、へ、ま
 う、ま、が、夜、い、か、の、り、と、ぬ、ま、り、叔、表、門、と、呼、き、ま、り、人、の、ゆ、り
 ぞ、と、ゆ、り、れ、と、教、て、一、云、の、言、う、者、は、し、世、馬、守、孫、心、と、つ、ら、裏
 門、へ、お、か、る、小、麻、田、け、て、番、人、見、に、た、り、た、り、ま、り、一、門、ま、り、け、入、見

又右唐門
の
驕奢
の
園



真夏巳二時雨

真夏巳二時雨

とばし 獲子に踏碎き 器物調度も引亂し 侍らも委しくる小
まのいし ちやうと 海はしきめとまゝ 他馬身大さ小怒り 何者
込入るか けりたる 狼藉とるせしや 巨細とやせし 罵るを 面目
もなき 能と上げぬ 事ども 洋と云ふ 上とん ねの 叔の 汝誠の 西の
ちやうと ちやうと きて 又も 河と 入物に 懸絶して 居たり ちやうと 他馬
大真つとて 悪き 盜賊 東と ちやうと まい ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
す 辰はして 眼と ちやうと 辰はして ちやうと 武家の 家にも 生れ 不脅る
ども 諸候の 教と ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
是材室と 奪と ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
けり 他人の 賊と ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
入る 事なき 様と ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
ちやうと ちやうと 味と ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
の後 堂と ちやうと 兵具と 帯せし 盜賊 都近 辺には 後石と ちやうと
ちやうと 東國 西國 南山の 國と ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
是ぞと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと
又右 浦門 仍巡 見候

天正十九年 秀吉公 関白 威を 沖猶も 秀の 次公 へ 遷り 移ひ 移さく
文禄元年 三月 日本 の 軍勢 と 奉て 大明 朝鮮 と 倭 戮し
移し 幸い 左衛門 記六 篇 是より 國々 の 諸候 或は 朝鮮 へ 渡海 亦も 肥
前 の 名古 屋を 在 陣し 又 畿七 道 悉く 空虛 と あり 月々 月々 の
兵糧 運送 諸々の 費は 都鄙 一に 困窮し 酷まひ 深殺 と 増し
て 百姓 虐百 姓の 又 未進 と 抄ら ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと

又右 浦門 仍巡 見候

天正十九年 秀吉公 関白 威を 沖猶も 秀の 次公 へ 遷り 移ひ 移さく
文禄元年 三月 日本 の 軍勢 と 奉て 大明 朝鮮 と 倭 戮し
移し 幸い 左衛門 記六 篇 是より 國々 の 諸候 或は 朝鮮 へ 渡海 亦も 肥
前 の 名古 屋を 在 陣し 又 畿七 道 悉く 空虛 と あり 月々 月々 の
兵糧 運送 諸々の 費は 都鄙 一に 困窮し 酷まひ 深殺 と 増し
て 百姓 虐百 姓の 又 未進 と 抄ら ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと ちやうと

其の中より落東大佛の門前に残り候とる石川又右衛門の彼を控
 が金銀と若干集る属多の者と配付し世の中の困窮せしめ
 奉らり罷しき婦女と教まらるへ昼夜二人と集めて酒宴と
 催し花と真し月ようそらたき揚りてい懸方り妓婦席
 下よ不せくつらりて酒宴と助け營る産業ありてくる遊
 宴の材室と敷しぬきは今の人の眼中に疑ひるきさだ様まに
 舟の海論より及びこれ先都と去て台と塞んさて二ツの計
 略と仰りし一属の悪業と集めてやるる尚附諸方の國々
 軍後と落しやうとよは水客の政を妙ひ下の私欲はして郡
 守と犯し搦むけ附と乗じ我く左衛門の命ありと仰り國々
 と巡りし或と虚げ深及と諸民の悪政を犯し或も國々海は

披露せば己が罪をと敷んて終結をてた扱ふに其時搦
 候と變は悪し希をさうふく抄びやうといひさすの材室と得
 二ツは我く大勢長く系中と細細せばはしうらびて其を
 引物に今宵の中は困窮と泪とひくよ出立大津の陣
 て合はしとくくわとれが終り魁首の命ははひ二人三
 人抄りて大津へこそい出立たり又右衛門のつひの女系は悪
 くいとまと逃し金銀とからち人其身も系とて大津よか
 けあそと若菜と改り松波友九郎とらる若年 齡拾合は
 自人殺と定め右衛門の所難本管迄至水と名系又右衛門の
 軀の後人の中し候り方端受けりてこのひは先長系大
 系が死に水口の機と別りかたのどく謀計を妙ひらるふ

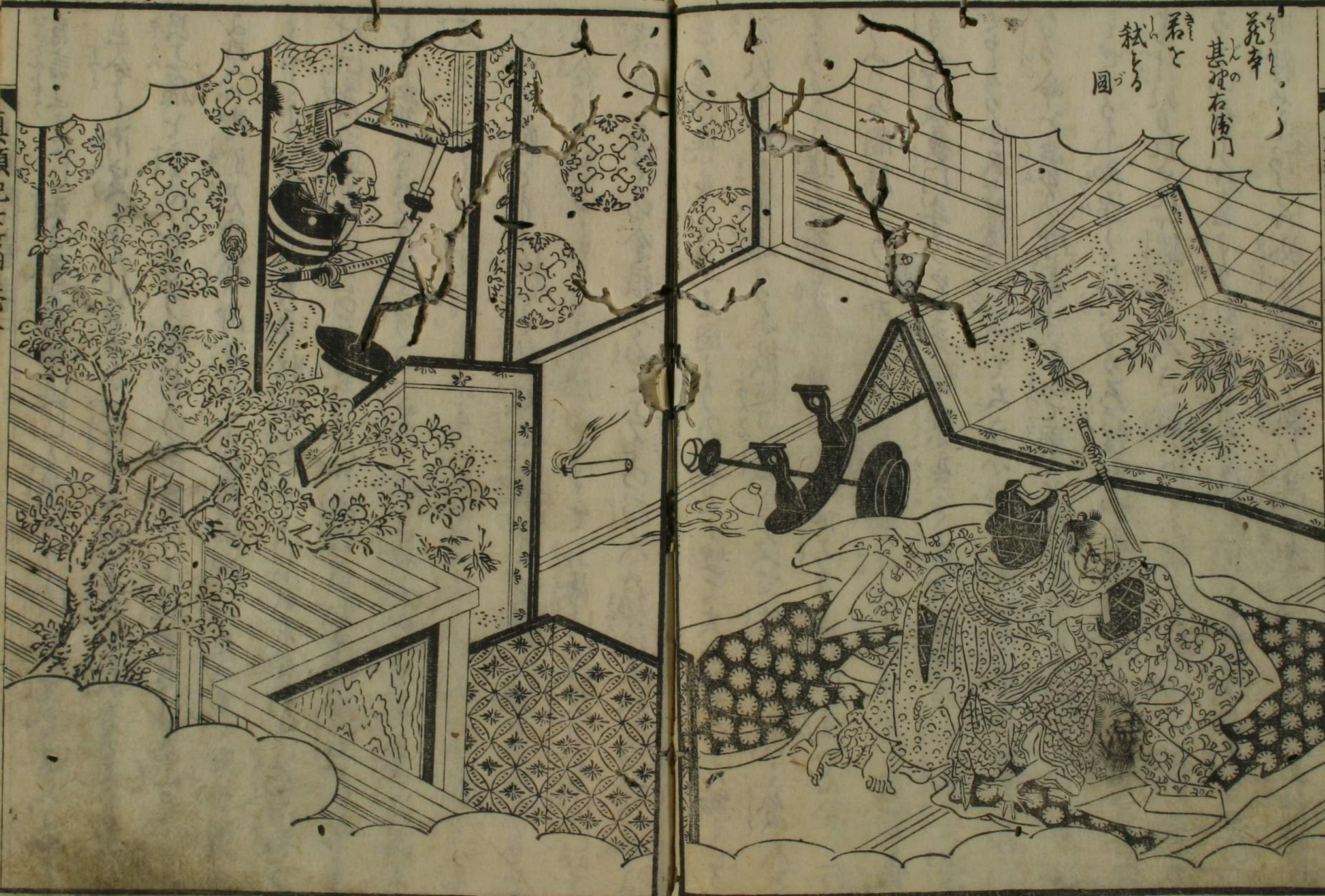


又右浦門
 英波の
 大垣又
 國



國守大老の名護屋表を立陣し 國家老長宗七郎左衛門高
繩右近等種々にお談し されど兎角を固よりのじ 目附にあ
らば首尾よく巡見お海をんば主人の所おめしうじと俵一
段内くそこぞくれ 其令を以て彼管沼主水と名乗し 簾本と
始り上下の役人へもくを納給し ところ所番侍よりく所紙
紙紙とまらばし 叮嚀よりとるせが方々の侍の形世に後人が
争ひよて幸わく水に立てまより 其流流人にして急ぎたる
懐の大垣の然るに後長門守と申せしが是れ名護屋表へ
後向して 紅老信樂堂之進國の政事と稱り居るが通て水
あ家やと申ははしく 其の英漢語巡見と抄ひてい宛め
て大垣にありんと水より密偵を以てまらくのはし知らせけ

と信樂堂之進を固よりの巡見と申て大に發き其物とさ
るに途すとお違ふ 小彼巡見候と申て伏せり 其く友人と
そめく進も素の進もるり地とよ平快し 其へんへさせた
まひる間様りの所巡見後管沼主水殿とていや大垣の城
自後長門守より 其素信樂堂之進所出迎のお系と謹
でやろふ又右傍門候つて大に小怒り主人を水を固より密に
る命と書り所書付を以て固くと巡見と申小け方より 其内
とせざる小出迎とい何なるる程ぞや大垣の然るを固よりの所
書付にのれんが巡見と申き 謂はしとくとも出迎も素て屋め
るものろくは是より 其換巡見と申しけり 名護屋表と抄ひて
所書もろくは汝が方より 其お出し 其止りく 檢見致せし



其の
其の
其の
其の
其の
其の
其の
其の
其の
其の

貞
言
七
七
命
卷
二

九

有言と云ふし或は妻月仕とて歳にや後せば空を遊大に母を
 且全く御定れとれなき小け方より御見方と祝きりといはる
 只上様とまじりなり縁外の御方とて体めなうん小臣が志
 より人の御巡見の候に御免下され替御御体足あそく御教書な
 しやうがわがこれ有平伏してまこといれは又右清門少し西と和
 げけ度の巡見隠密の上まゐるれが用なき出逢ひ迷惑になどま
 じり希まうせ縁外より一宿とぬし巡見のころ明日の御法よ
 りおぼしとむ小田村よりおたを夜にゆりぬ大垣の家申毛
 と吹た鳥とてしとと縁外に再び人と馳て水口の申うとと
 御合はし何よりとと縁外のとてお海はしはへんが少し心と
 安心とまの令銀をいよと下の役人又縁外にしが少の非と
 前國にお海大垣とて尾張治とて強きなり

又右清門朝と後

安んはた岩村の城を田丸中勢少補の老病より中々名護屋御
 陣の御佐を免せしを在國してあつらひ病体も次第よきなり
 元来世継の男よりいよとて内室の親族係は兵庫の女御
 を猶も又定めん一家中其評議とりかきりしは家長は
 本甚だ右清門といふ者叛逆を企て中勢の病老よりとまよ
 己が妾腹のよとて主人のよるといふり國家に押込せし
 計り病中より中勢少補とていふり知り甚だ右清門と
 近く抜き物語りて作りては短刀と後て腰腹と一カ
 じしと長病より自中るに実貴くかきりし

俣は為麻と扱せてぐ其押右邊門板に我叛逆とさし
 うり今い疎どると蓋皮とさしひらん病勞さうる人とな
 と踏例短刀と奪入て心下と突抜うけ物言はるるさ次
 の間又押入し若者七八人走来りけりさまと刀々く一月は抜合せ
 其押右邊門と寸短くは切捨うりされが家申の若お後し
 て中勢が横死と強一機は来次云へ後者とて家船お續の
 御書と差知し引續て中勢が病死の旨と伝へるる是は後と
 樂よてしとまはし俣後あうる小中勢が死去何と申し人殺り
 一言のよとる病死見改めの指使として後原大七郎と若
 林の城へ差紙給ふ附は石川又右邊門の尾州治はありてけり
 と同いす屋敷のいこと出来さうり見よし大令と得て俣

等よし碓おさせんと計略とよりしと俣し合せそ身は岩村か
 由出逆と号し上俣の来り人きる節は出て結合せり形を謀
 計かといはるるはさうり上俣後原大七郎上下の伏せり三十
 余人を身は馬に繋ぎて岩村とさし海に弛たるる石川又右
 邊門まといんより後原が馬を死に下げ回丸中勢が家来
 進反法三郎と申若をい御上俣逆のさし是まで為上俣
 案内はりしと謹でのぶる小町噂のさし案内とさしとの
 俣は俣の馬を死に先立服及へ牽引さうり其計のいん
 とは俣のさしぬがのいん知らん終は又右邊門が案内さし
 左右の岸さうり只一筋の山治にこそいりさうりてけ不は石川
 が月殺七十余人埋伏してさうり小町おいはしと後原が馬の死



悪党
理伏
源
討殺
國

真田七篇卷二

十一

後をえりこも一言の同意に及びた抜くまで討てうま
又六人の斬らせうり大七郎大さ小母り苗村岡白殿下の後
うる某は狼藉と勤めあつた者山城こそそつらんどもれし
捕り大飛又多しんと家来も下知し自大刀とまはして切捨ん
とらるるを又右衛門多とけける次盛城系に上候り自ら
かみ押りし強ふ又及び某ははまうせ侍人と大右刀善向よは
かざし討て多るといひしうまあて福系が首と忽ち宙に討
落しぬ是れかんとあつてあつてあつて中間下郡肝と冷し
強むあしるは求めて迎んとはさしと左右の扉風とまはる
本らだ切洋ふて登るるは能らば若後はは城出雲の大勢自
とらるる固められぬは城は細中の愈に強しく皆一は又多と

け命だうりの出たをけいと去よいよはし啼々れども元来無慈悲
由城守るんむかひしより切殺し終る一人もあつたのりはし
又本陣門先と刀をく大はば自其馬よまはさうり槍長刀が勢
よまはると其まは集るる京都の上候と候り山石村にして急
ぎに創稀なる別置あり

田丸の家断絶

石川又右衛門と候るりと候り山石村に別置と候り田丸の家老
周八半途よ出て違なり恭しく城内へ案内し客殿は清じ
て御食應答と候り内儀は清じの役人より清じ黄令とらじ
て後陪し首尾の令うらんをそのまはるりけ時上候の道智の
本は仕立る濃奥小三郎あつた悪党田丸の家老中尾権之助

又右邊門
岩村の地
訓方國

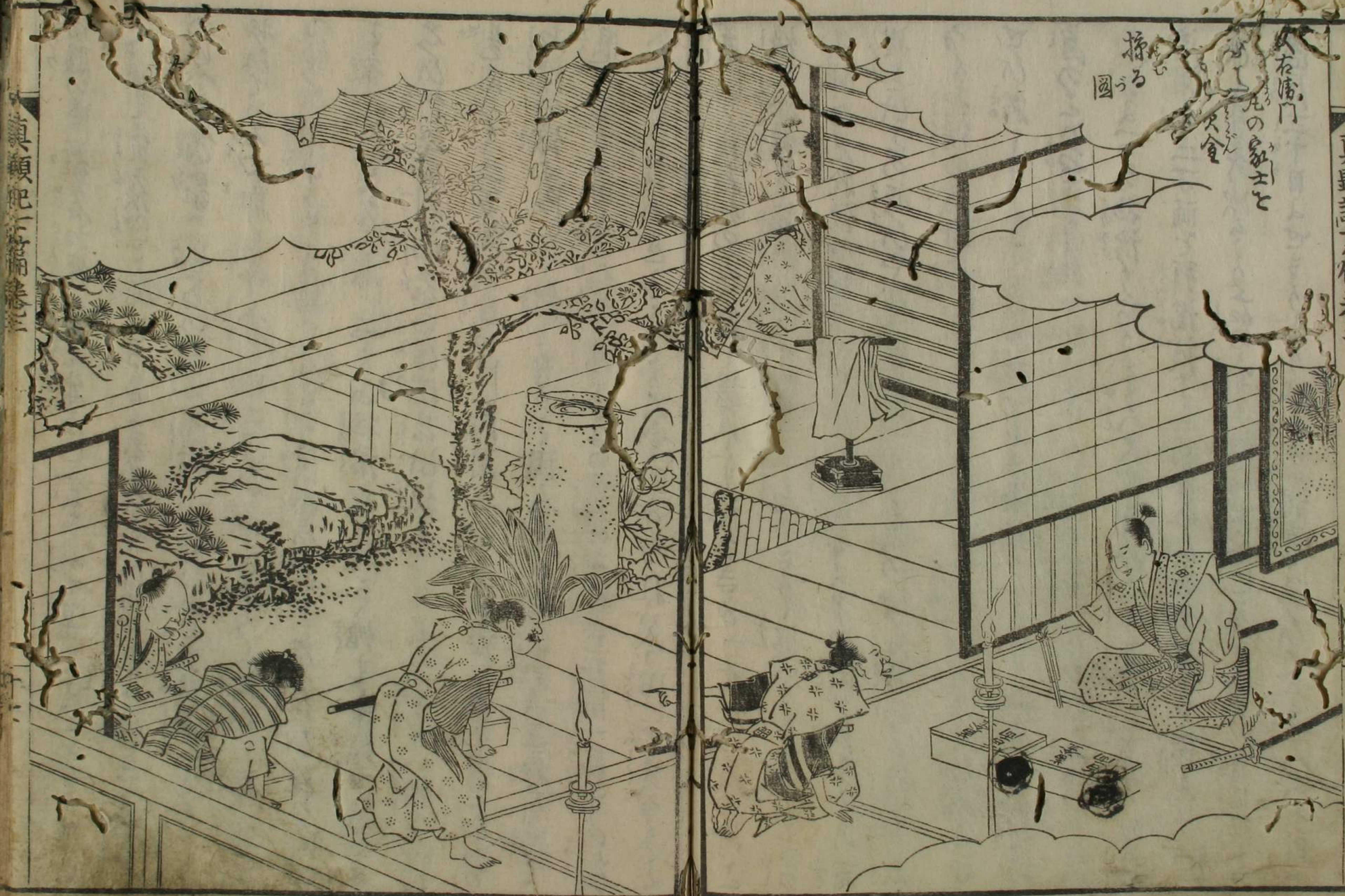


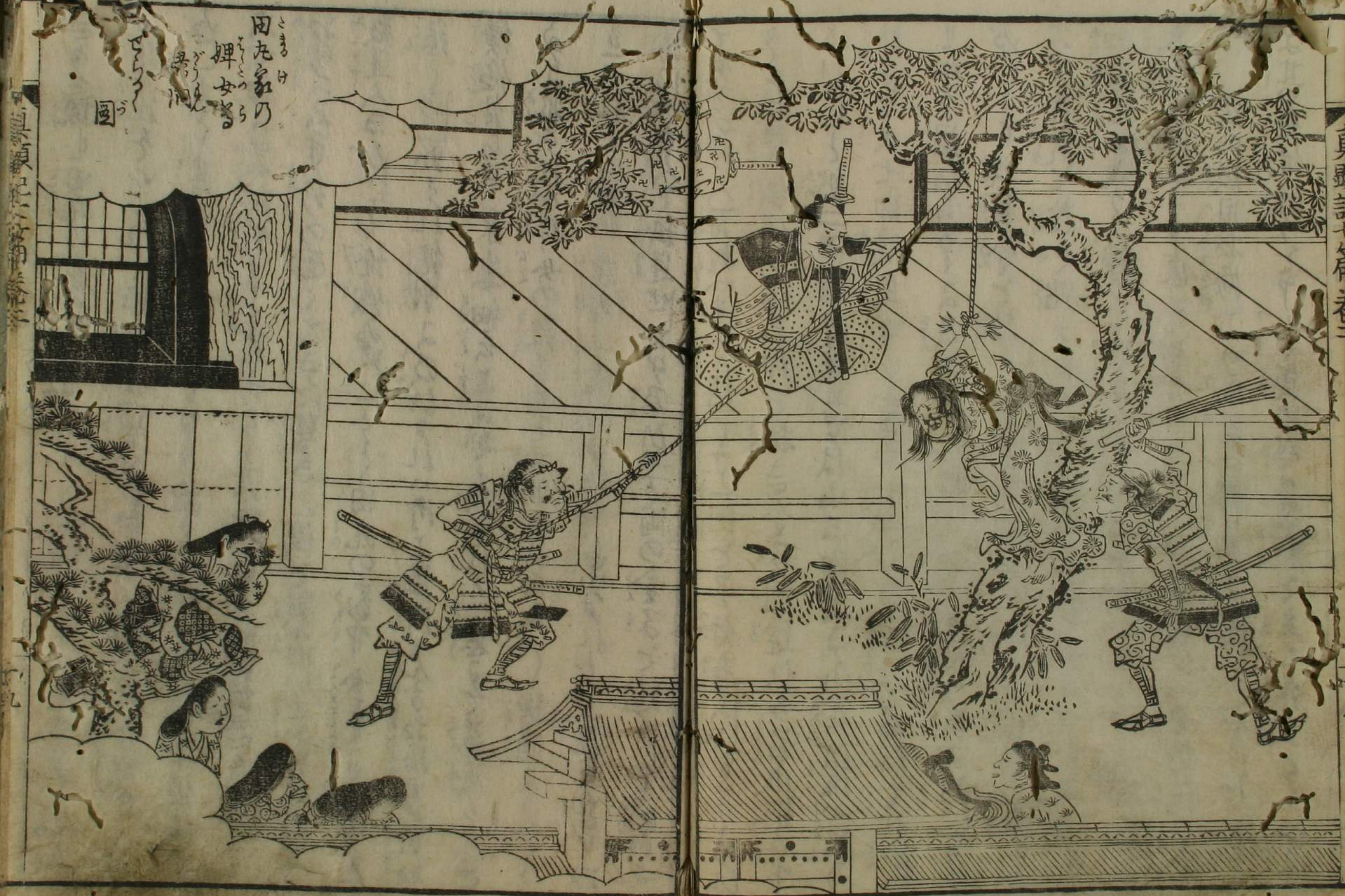
いふが者と一室へ密に托き教といそりて中
殿庭の傍を突いた家内を其様右邊門が
大七郎を細めよく知門より細く小
津波より河をさま幸みあげらる家督の
に狐さるべき者よ多しし時至人後系
大七郎が一言して或る美く
を回丸の家賊とよびふると歎き不
乞は遠く出候へ候れり今日よ
我々此の世にいづといひ終りや
命のどく至人申勢横記の
くね細のこの世を隠れし
復に心海と福原殿の乞津
此の足捨流りぬれりやと
此のこの世の恨みやげなき
くお候の候所下さうや
まびねとて小三郎勝と
あのことにおよ急難と
きさよ一は物知り
津波今二万両と
よけ節季次より右
富月三十日よせまり

いふが者と一室へ密に托き教といそりて中
殿庭の傍を突いた家内を其様右邊門が
大七郎を細めよく知門より細く小
津波より河をさま幸みあげらる家督の
に狐さるべき者よ多しし時至人後系
大七郎が一言して或る美く
を回丸の家賊とよびふると歎き不
乞は遠く出候へ候れり今日よ
我々此の世にいづといひ終りや
命のどく至人申勢横記の
くね細のこの世を隠れし
復に心海と福原殿の乞津
此の足捨流りぬれりやと
此のこの世の恨みやげなき
くお候の候所下さうや
まびねとて小三郎勝と
あのことにおよ急難と
きさよ一は物知り
津波今二万両と
よけ節季次より右
富月三十日よせまり

大右衛門
丸の家士と

掃
國





とまるけ
田丸家の
婢女

圖

貞節言叶篇卷三

きつろぬも田丸の家をいり首尾よく上使参りの上とて主人
 の御礼をいりて候所二男と家督と成りて上洛と遂
 じしとて其後後よりくわりゆる小教目を経て上使福永
 大七郎の岩村領までと下のころに斬殺されし後き京都へも
 おつへ又きりの面く大きに驚き上使と教書しとて思まじうり
 殺入人きびしく詮候なりとて田丸の家申女をよめること
 悉くせしむるに乳明及びいたる所上使申見せお海家督お
 續任付らるる系委細云とて押さびたれと一應して為る人き
 りぬ難ざれが婦女の乳をせと石出されたまへく拷問よりけり
 是れが上使の別居の二統月々の中系るれども系幸甚也右
 使申が主人と執達せしめ及び二万兩の金子と送りしとめ白く
 云上しつるふ上使殺害の候に盗賊のふあふ小梅りぬとて後
 死と痛死とあり割へ大令と極端して家督と乳の腹を
 不届の所沙汰は處て岩村又万石と石とて是家申沙汰
 追放付らるる田丸の家永く絶絶及びいたるは是れとて
 上し次第なり

根来寺宝塔程盗賊

去程又大盗石川又右衛門の山岩村を大令と掃ち山中に寄
 集り相候してやろる水に大垣岩村をて完又余程の得付り
 何とて浦よりゆり候とて度りたるまに京都及び名護を
 討むの軍兵と来りてしまし令りけり一兩年のお休もい金
 死して強く盗賊とためしといふ人殺りてい人目といふ



又右邊門が
属する
旧方へ
退散する
圖

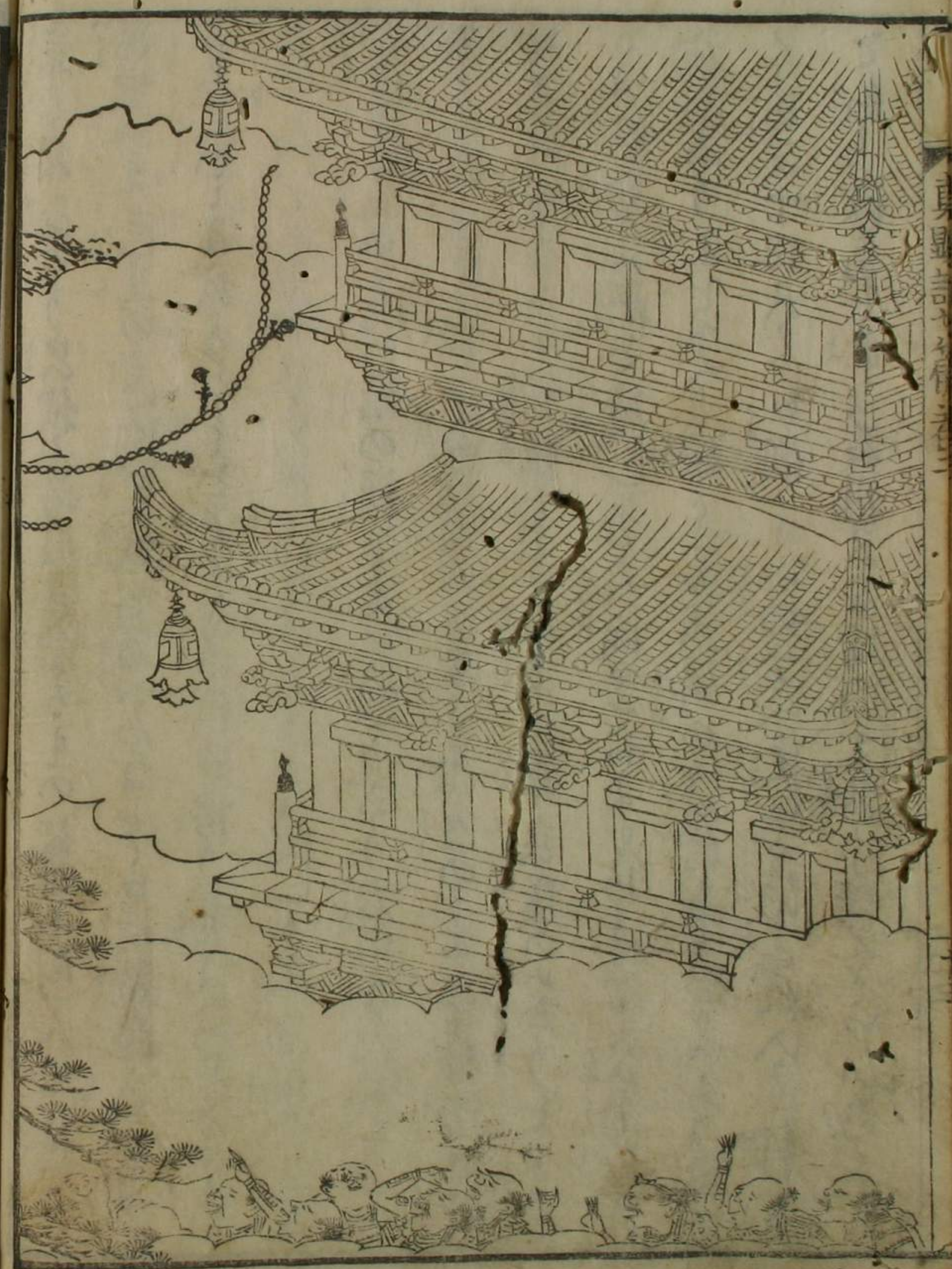
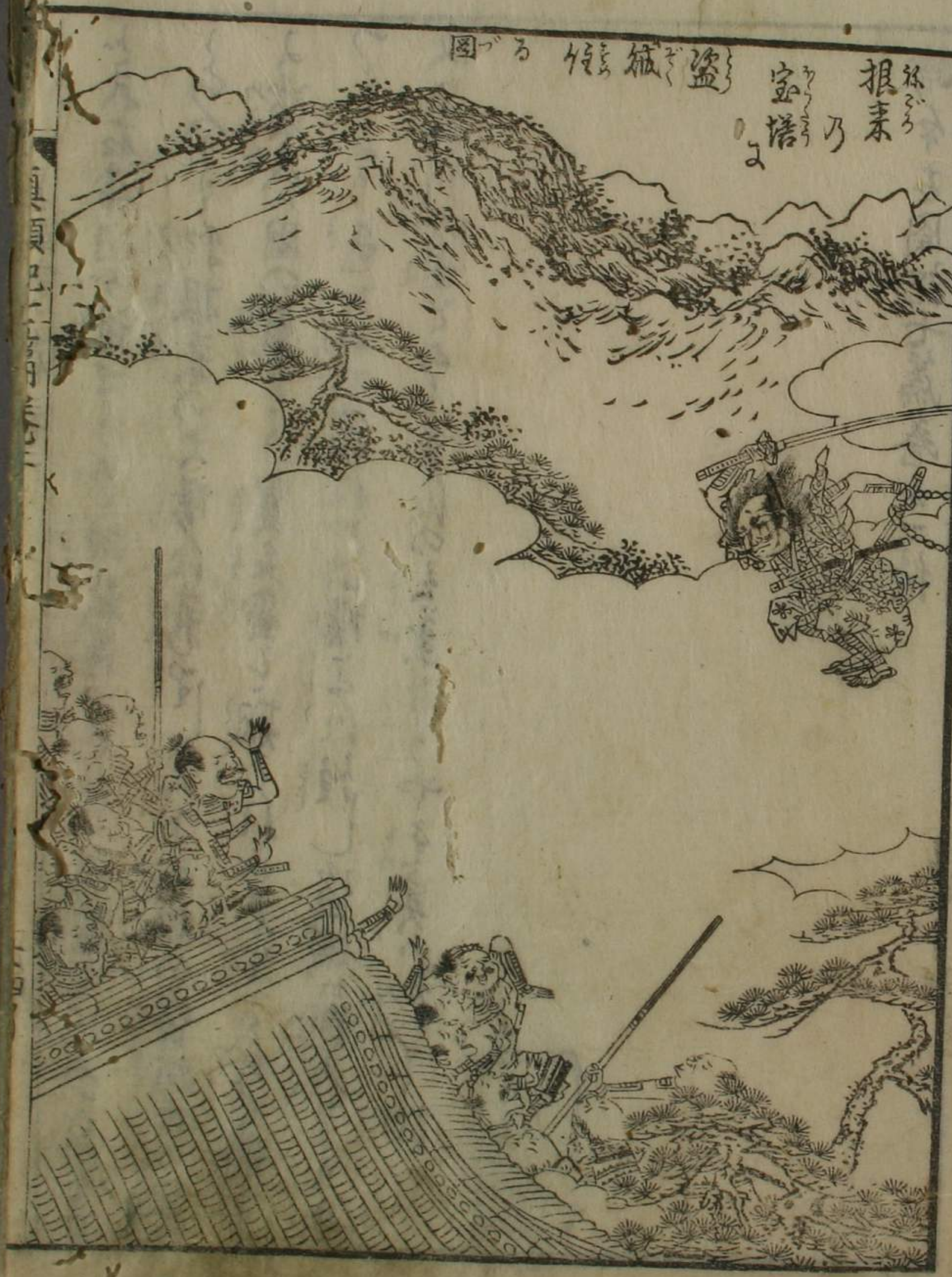


せし我一人團とて柵圍し奉奉秋のたじめより紀伊國根来寺
 寺とて名合とていどく人の智らぬうちを敷せよと下知しけ
 とは籠籠集控六回て曰く冠首紀州の根来寺は何れの名
 坊は遍問し終ふや我々が合せん候りよ名成徳ありてお別ん
 又右邊門着て我若衆の時より根来寺の大塔又重目又佐
 ぶらたを構へ候り我とらんとも若し巽角の指ともども
 町くばしよ通じてよよ安ゆ属々の若とも是と仰てたまきよ
 終るま室の冠首の九人よらう候ともよといとまと告てとひく
 又三より其明年又孫癸己の年紀及根来寺又重の室
 塔は盜賊候く近村近郷と犯し強とはし紀州一國其は法
 のいひたるやらせられ根来寺の傍に彼来の旅人も絶て白昼

とくとも物とてく是を稀代の珍なりと國守中納言秀
 後御より物訓ふる武士三四人と密に根来寺へ遊し奉の實否と
 見せし終ふよ一人の男のつけ六尺身なるが彼大塔とて
 十余間にして樺樺乃み其柱よさうくとせりそをより大
 塔の又事の屋根よいらくと冠首被勢何換人間業よのみ
 ど天物などの候よこそと吾と事て云とせり中納言殿安う
 ぬりよと云し我知る國の内は係るおせ者の候んよ知らば
 てあるんは權勢をたはぬらう塔の下より火と殺らてはら
 てはけよはしと云よ三百人の兵と集り根来寺の衆徒と
 合て同討は彼塔のめぐりよ押寄一日は懸波を焼り柴薪を
 積立て一討は燒崩さんと討たる候よと云き屋根の中

ありて地とまひ遙るれば彼盗賊のありやなしや戦ひ地行
 るるありんやはいづらふにけ塔と焼とらんり勿許はしむる
 年季を云け根素寺の軍勢とほし向移ひ合戦及びし又堂
 宇悉く灰燼とありし附に焼ありしでそれ室塔ありと
 次四城のにおは焼失んぬに橋三次切ありとて塔のちぐりを
 打ちこもさまぐ譯後には、多勢あり又重しの振例ありの盗
賊取し出る捕は 備を おせ遙る下と見おし 完介と お
待とつ 身の大 多 そ ら る 使 の 盡 ら る が あ る ま い は る 我
 日本盗賊の天子より今日とまゝ又明日の夜も来らん
 或附に不二の山より賊軍又附して松尾象原の風系と見て
 酒宴の由とより下し金銀の天下は我のなり又女は天下

悉く我妻あり只我の肉よいづらひの豊を一人の^と捕と
 況や汝等匹夫の^をとして我と捕へんまぐり行腹痛き^のら
 とや汝も我も^ととらん末代の^の語り^のまよふとせよとく
 二王互に^のに塔の^の鉄と^をて引ちぎり右の^のに^をカと
 扱てに^しに^し教十丈の^の塔の^のこり^の飛多の^のどく^とび^りし
 目とま^しう^らる^る新^の法^のあり^の軍^の兵^の塔^のち^ぐり^とを
 てけ^の飛^の勢^のと^を肝^とと^を冷^し是^の人^の同^しそ^のい^より^にし^と又^の遊^のは
 着^りあり^とと^りへ^と強^く不^の死^の保^のの^盗賊^を力^とと^らう^り目^を
 く肉^は十^に又^人切^倒し^の方^へ度^が深^ふた^のく^の方^は
 と^あら^はじ^は世^よる^石川^又右^の傍^門が^築け^る塔^とい^はれ^る



と又右清門が後せしむ時我運つころ刑罰もはめて死する
と人とも根柢の大塔に築けし天下を双の次盗賊あり実
又次盗人の國の嵐なり山嵐を期これゆんやとて刑
つとより是とて足れば塔に建し次盗賊の別人なりや
又い石川が世とらうまの云系なりやそ実の知べし



繪本古図記七篇卷之二終

